

2019年読書・映画で記憶に残る作品

1、 「韃靼疾風録 上下」 司馬遼太郎著

この本は1600年初頭明末から清初時代の平戸の侍と女真族の王女との数奇運命で満州に渡り、女真族の大汗ホンタイジの部下となり、明の滅亡と清の建国を描いた司馬遼太郎の歴史小説である。

当時の明は1億人余の人口だった。一方女真族（後の満州族）はわずか50万人の少数民族であった。しかし2代目大汗ホンタイジは兵士6万人ながら権謀術数を巧みにして明を滅ぼす。

その後摂政ドルゴンや康熙帝など名君が続き、呉三桂など明の旧将軍の反乱（三藩の乱）を制圧し、1681年に中国全土を支配することとなる。5代目皇帝乾隆帝は中国史上最大の領土を支配する。習金平主席が目指す「中国の夢」はこの時代の世界らしい。尚以下の作品も面白かった。

- (ア) 「李自成と李巖」 小前亮著
 (イ) 「賢帝と逆臣と」 小前亮著
 (ウ) 「海東青」 井上由美子著



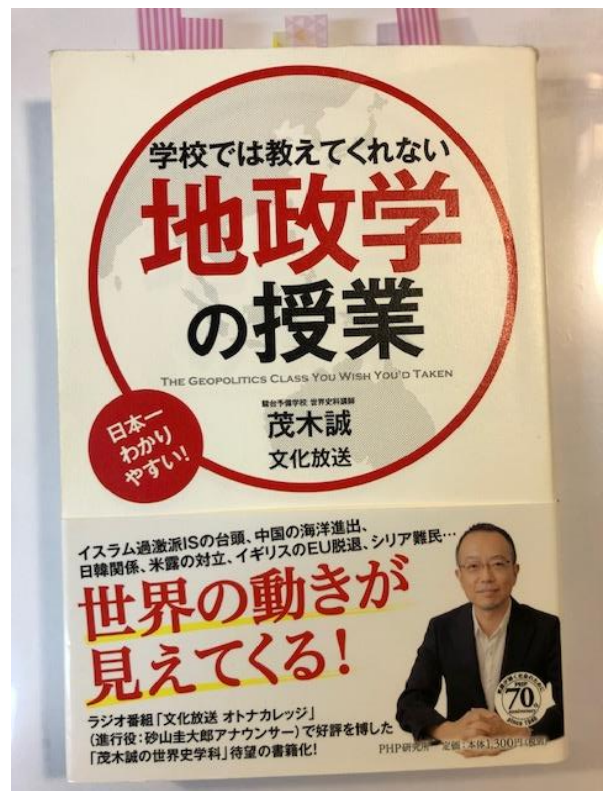
2、 「地政学の授業」 茂木誠著 2017年

茂木氏は駿台予備校の講師である。本作はラジオで講義したものを書籍にしたものだ。地政学についての本は多いがこれが一番解り易く本質をついているように思う。

著者は、地政学の本質はリアリズムであり、隣国との「縄張り争い」を解明する学問と述べている。山川書店の高校生向け世界史を引き合いに、戦後日本は自虐史観が蔓延し、戦略的思考を放棄し、戦争は正義の国が勝ち、悪い国が負けるという善悪思想で解説されているという。

この思考方法は、誤った歴史認識を招き未来を見誤ると指摘する。「戦争は強いものが勝ち、弱いものが負ける」という至極当然の理論が真実なのだと解説する。

当たり前のようなことが日本では当たり前でないのは戦後教育の負の遺産だ。歴史を学ぶと「正義と悪魔はその時代の為政者（勝者）のご都合で決めている」ことが良くわかる。古今東西世界の歴史は概ねそのようなものだ。



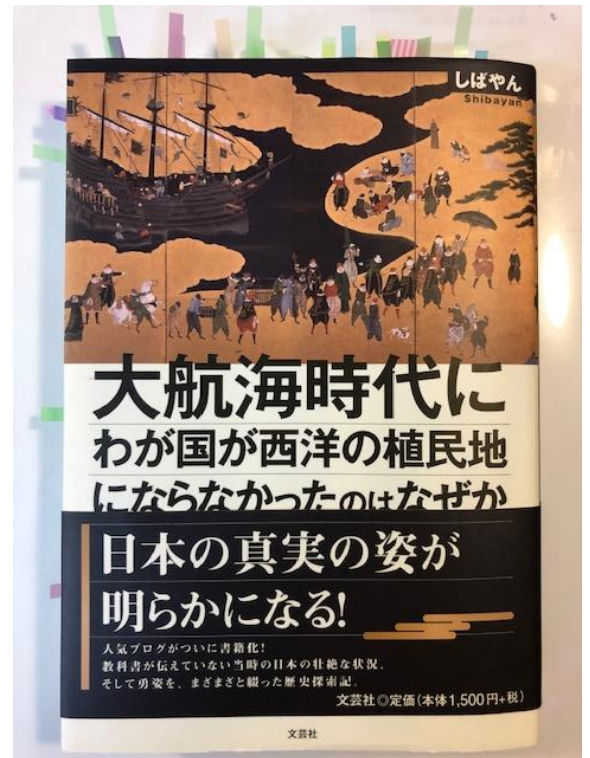
- 3、「大航海時代にわが国が西洋の植民地にならなかったのはなぜか」 しばやん 著 2019年
著者のしばやんは、10数年前から「しばやんの日々」というブログを掲載、日本史の関する論考を600本以上発信している。累計アクセス数が5百万件を越す凄腕ブロガーである。

さてこの本は戦国時代(応仁の乱から1637年の島原の乱まで)の日本についてのこれまでの歴史上の通説に挑戦する。この時代に日本人奴隷が多数(数十万人? ブラジルや東南アジアなど)輸出されていた。またキリスト教伝来の数年前に種子島に鉄砲が伝来し、数年で日本は鉄砲の大量生産体制を構築し、世界一の軍事大国(鉄砲生産高と戦闘員の質量)になっていた。秀吉の朝鮮出兵は、当時世界の覇権国であったポルトガル・スペインが支那を侵略し、その後日本支配を目論んでいた情報を入手し、先手を打ったとの説も紹介している。こうした歴史的事実はブラジルの記録や多くの宣教師の手紙などから論証されている。

また秀吉から家光までの日本のリーダーは、海外(ポルトガルとスペインが中心)からの侵略を非常に警戒し、キリスト教宣教師が諜報員であったことも見抜いていた。島原の乱は日本とポルトガルの最終戦闘でオランダは江戸幕府を武器弾薬で後方支援した。この貢献で幕府はオランダのみに海外貿易を許し、その他のキリスト教宣教師は完全排除する禁教令を出した。

しかし江戸時代が鎖国であったとする説は一面的で、オランダ・中国・朝鮮とは貿易が盛んで、島原の乱以降もしばらく貿易額が増加した。しかし主要輸出品の銅の産出が減少したことから海外貿易取引は衰退した。

著者は、歴史の真実は勝者が宣伝したい歴史と封印された歴史の双方を学ぶことが大事だと説く。昨年「日本国紀」など日本史見直しブームが再来しており、多くの日本人に読まれることを期待したい。この著書の中でも紹介された「鉄砲を捨てた日本人 日本史に学ぶ軍縮」ノエル・ペリン著も大変面白い。徳川家康は当時世界最大の兵器大国であった日本で軍縮方針に変えたのか。これは興味深い歴史上のテーマである。



- 4、「オスマン帝国外伝 愛と欲望のハーレム」 (DVD)

2019年の年始のテレビ番組が余りにつまらなくて、ツタヤのDVDで借りたものだ。

16世紀中東の帝国であったオスマントルコの英雄スレイマン大帝の生涯を描いている。トルコでは大河ドラマとして大人気だそうでドラマはシリーズ50巻以上にも上る。今回は19巻まで観たが、我が国江戸時代の大奥に似た愛欲の世界と征服戦争の様子が散りばめられていてかなり面白い。

戦争相手はキリスト教世界としてのハンガリーとのベオグラード征服とロードス島攻防が見どころだった。トルコの娯楽TVの水準は相当高い。なおこのDVDに触発され次の本も大変面白かった。

「ロードス島攻防記」 塩野七生著

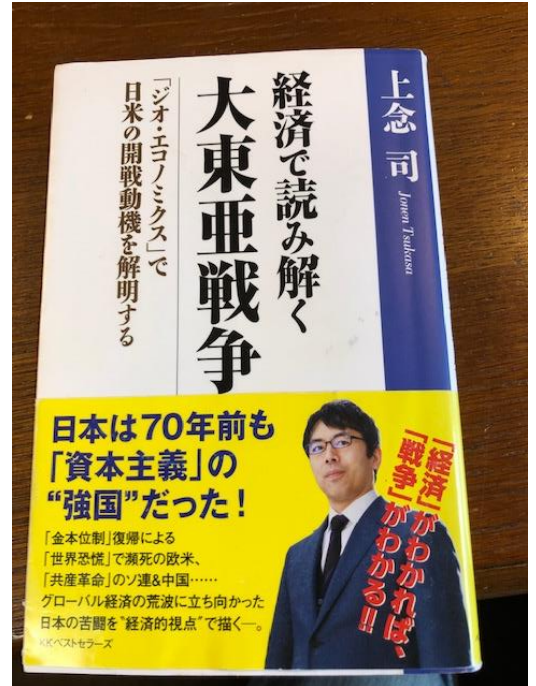
5. 「クラウドからAIへ」2013年、「AIの衝撃」2015年、「ゲノム編集とは何か」2016年、「AIが人間を殺す日」2017年 4冊とも 小林雅一著

AI（人工知能）と呼ばれる技術は1950年頃から生まれたそうだ。それがこの10年脚光を浴びている。身近な例では自動車の自動運転だ。Googleが先鞭を切って開発した地図情報とさまざまな技術を統合してハンドルに触らない自動車が生まれている。高速道路では既に自動走行は実現している。最近外国語翻訳機が登場した。外国人との会話で苦勞が無くなる日も近いかもしれない。

このAIの影響として、オックスフォード大学と野村総研が2015年に600-700種の職業の内10年後には50%以上が消滅すると予測した。18世紀にイギリスで蒸気機関などの産業革命でラダイト運動という機械打ち壊し運動があったが、既存労働者の仕事で代替可能なものは無くなるのは歴史の必然だ。AIは自動学習能力もあるのでドンドン性能が向上している。将棋と碁ではコンピューターが登場し人間を超えた。医療や軍事への応用範囲も多く、その応用は拡大している。

6. 「経済で読み解く 大東亜戦争」 上念司著 2015年

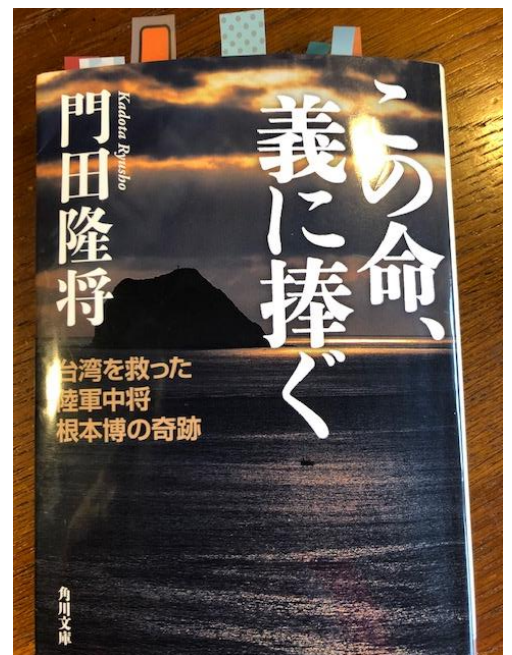
我が国の歴史教科書には「なぜあの戦争へ向かったのか」という疑問に答えていないと著者はいう。近現代史に関する本は、軍部の台頭、政権の混乱、経済悪化などを指摘しているが、著者は経済悪化とそれを招いた経済政策（金融政策を含む）の誤りを鋭く指摘する。この本はあの戦争（太平洋戦争）で、日本国が戦争を選んだ理由に、愚かな金融政策があると批判している。それは現在の金融財政政策に関する評論でもある。なお著者はユーチューブの「虎の門ニュース」でコメンテーターとして毎週発言している。中央大学弁論部部長の弁舌躍如たるものがある。



7. 「この命、義に捧ぐ 台湾を救った陸軍中将 根本博の奇跡」 門田隆将著 2010年

時は1949年6月、旧陸軍中将の根本博他9人が宮崎県の延岡港から台湾に密航することからこの本は始まる。この密航に関わったのは、明石元長（明石元二郎元台湾総督の長男）、吉村是二などがいた。1949年2月は中国共産党が国民党を駆逐し中国本土を支配した年だ。しかし金門島での戦闘では国民党が共産党に完勝した。その陰に日本の軍人が顧問として大活躍した。

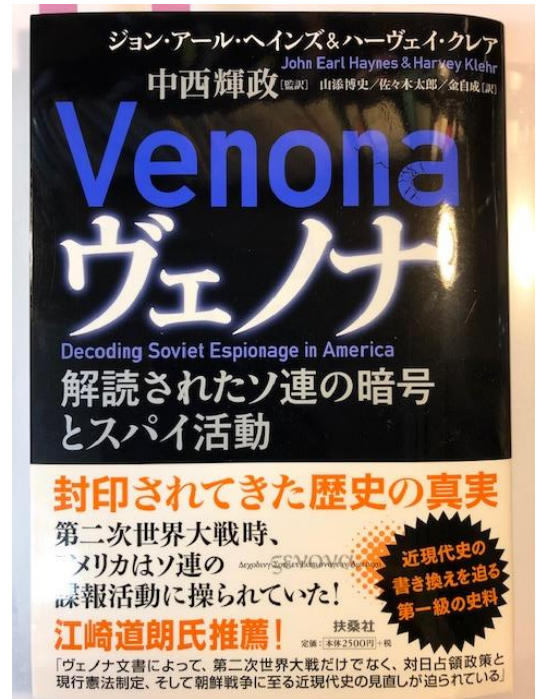
2009年10月25日で金門島の地下講堂で「古寧頭戦役60周年記念式典」が開かれた。この式典には著者の門田隆将と明石元紹、吉村勝行（60年前に関係した明石氏と吉村氏の息子）も招待されていた。時の馬英九総統は、金門島の戦闘で日本の旧軍人の関与を公開した。それまでこの歴史的事実は台湾現代史から抹殺されていた。総統は媚中派親中派と批判されているが、歴史認識では正しい判断をしたように思う。韓国歴代統治者とは雲泥の差である。



8. 「ヴェノナ」 中西輝政監訳 江崎道朗解説 2019年

Yu-tube 「虎の門ニュース」で江崎道朗氏と上念司氏の会話の中で紹介された本だ。ヴェノナとは第2次世界大戦前のソ連コミンテルンの暗躍（スパイ活動）を暴いた記録だ。米国陸軍が戦前・戦後のソ連側スパイの暗号化した通信を傍受し解読していた。重要なことは、ソ連スパイがルーズベルト政権に深く入り込み、対日戦争を含め世界戦争を拡大させ、資本主義世界を疲弊させ、共産主義世界の実現に工作していたことだ。そしてそれは現実的に先に戦争の帰趨に大きな影響及ぼした。尚コミンテルンの暗躍は日本の戦後政策にも反映されていると江崎道朗は指摘している。

ところでアメリカという国は自由と民主主義を尊ぶ国であると痛感する。この文書は一部少数の政府高官だけに戦後何十年も封印されていた。しかし公文書公開法によって1990年代に開示された。2010年に中西教授（京都大学法学部）監訳で翻訳されたが当時全く注目されなかった。しかし2019年中国共産党の独裁的体質が露見し、共産主義とそのルーツであるコミンテルン思想に注目されたことで復刊された。国際政治の現実に驚愕する本だ。



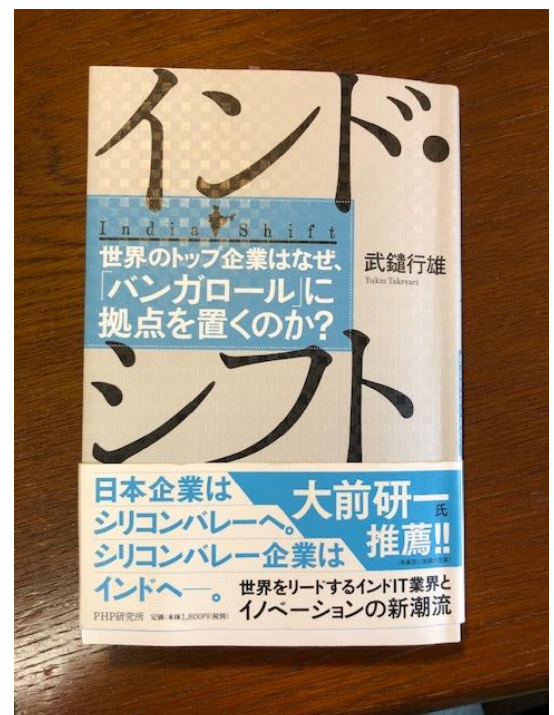
9. 「インド・シフト」 武鎚行雄著 2018年

副題が世界のトップ企業はなぜバンガロールに拠点を置くのか?である。深圳が中国のシリコンバレーと呼ばれているように、バンガロールはインドのシリコンバレーと呼ばれている。著者は元ソニー・インディア・ソフトウェア社長として2015年までバンガロールに7年滞在した。ソニー勤務時代にMITに留学しており、ソフトウェア・アーキテクチャの専門家である。

インドは30年前からソフトウェアの下流工程として欧米企業からの受注生産で発展した。2016年その市場規模は16兆円だ。インドは製造業では遅れたがソフトウェアでは驚異の成長を遂げている。中国が日本の電機・電子部品の下請け工場として製造業で発展した歴史と対比できる。

インドITのトップ企業であるTCSは45万人、2位のインフォイスで20万人を雇用している。今やグーグル、マイクロソフト、アマゾン、オラクル、SAPなど世界の名だたる企業は全てバンガロールに拠点がある。中国のファーウェイ、韓国のサムスンも千人以上の研究員を要する拠点がある。

バンガロール市は標高1000mに位置し気温が25度~35度だ。人口10百万人（内IT技術者が2百万人）で高額収入の世帯が集中しており、生活水準も高い。昨年来の米中貿易戦争がIT覇権争いで

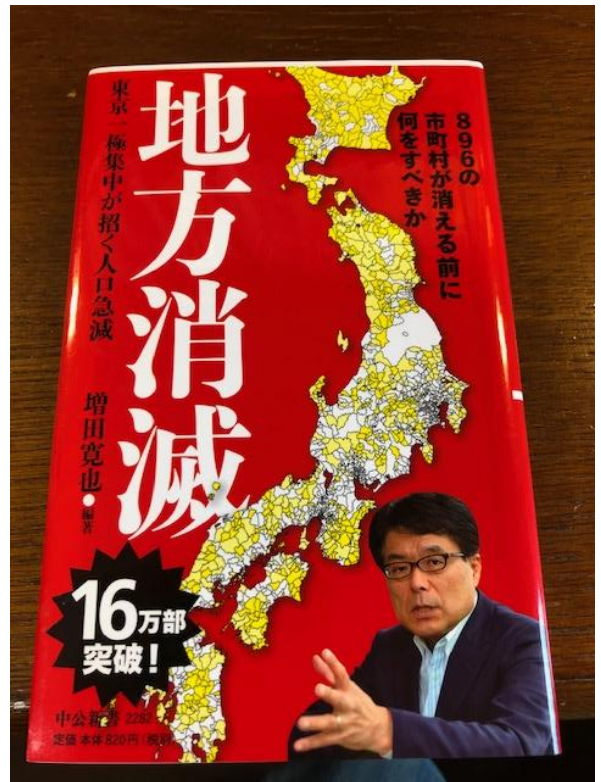


あることが明白になりつつあるが、米中に加えてインドの経済動向にも留意が必要だ。

10. 「地方消滅」 増田寛也著

7月に丸の内プラチナ大学に入学、「逆参勤交代コース」の受講生として9月埼玉県秩父市と長崎県壱岐市を訪問した。地方自治体幹部との会話の中で、彼らの根底にある危機感を刺激したのがこの本だ。

尚地方人口の減少を止める方策よりも、都市と地方の「関係人口」を増加させる方策がより有効ではないかと思われる。(詳しくは本HP「逆参勤交代旅行記」をご参照下さい)



11. 映画「ホテル・ムンバイ」 アンソニー・マラス監督

豪・印・米の合作の実話を基にした映画だ。2008年に起きたムンバイ同時多発テロ事件を基にタージマハールホテルの従業員が人命救助に立ちあがる英雄的な行動を描いた映画だ。

映画を観ての感想は、①犯人がイスラム原理主義に洗脳された少年であり、機関銃を乱射し無差別に173

人を殺害300人に重傷を負わせた ②ホテル従業員の勇敢な対応 ③警察当局のお粗末な対応と信じられない程弱い警備体制(治安体制)だ。10年たったこのホテルにいつか行きたいものだ。

鑑賞中はハラハラドキドキの連続であったが、最後に米国人夫妻と主人公の赤ちゃんの姿が印象的だった。今年最高に感動した作品であった。

以上